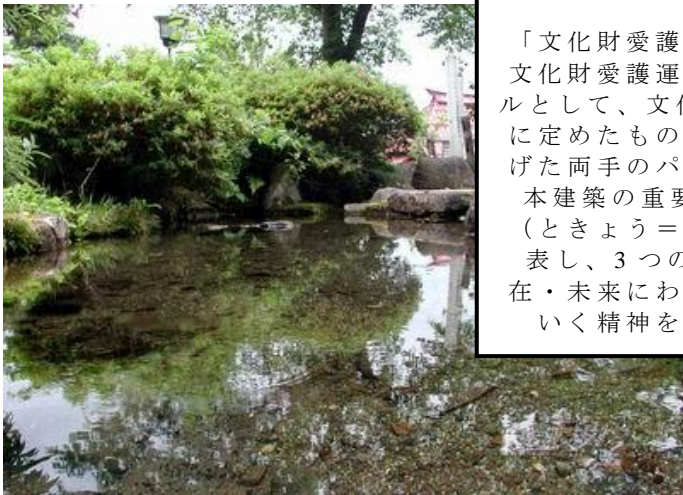


文化財愛護シンボルマーク

「文化財愛護シンボルマーク」は文化財愛護運動を推進するシンボルとして、文化庁が昭和41年5月に定めたものです。マークは、広げた両手のパターンによって、日本建築の重要な要素である斗拱（ときょう＝組物）のイメージを表し、3つの重なりは過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していく精神を象徴しています。

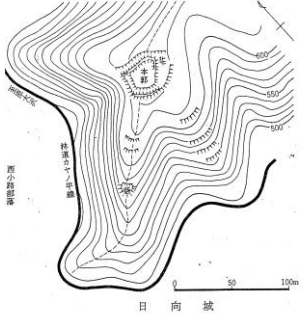



村 宝





<p style="text-align: center;">史跡 (指定番号第1号) 朝日ゴウロ</p>	<p>○「木島平村指定文化財(村宝)」(木島平村教育委員会 H7.11.24 発行)より 村体育館のすぐ南側の田んぼの中に、ぽつんと大きな1本のエノキの木とその根本に丸く石が積んであります。これが朝日ゴウロ古墳です。 今からおおよそ1500~1600年ほどの昔、人が亡くなったときに石で室を造って埋め、その周りに河原石を積んだり、土を盛ったりして塚(お墓)を造りました。これが古墳です。ここにもあったのですが、壊されて今はありません。しかし、古墳であった証拠は残っています。その当時に使われたと思われる長刀が3、弓矢の先につける矢尻(鏃)が2、玉類、土器などが発見されています。</p>
<p>所在地： 大字往郷字沖田 923-6 指定年月日： 昭和45年11月3日</p>	<p>○木島平村誌からの抜粋 木島平村役場西南方の水田中にある。馬曲川扇状地扇端に位置し、木島の低湿地と飯山市街地を望む眺望絶佳の地に位置する。川原石を用いて積み上げた積石塚古墳である。水田によって周辺は破壊されているので、原形の大きさは不明である。 形状は円墳である。かつて調査されたが、記録が残されていないので石室の大きさや形状、遺物の出土状態等については全く不明である。 出土遺物は、直刀3、鏢1、鉄鏃2、玉類・土器類である。このうち土器類と玉類は所在不明である。直刀、鏢、鉄鏃は木島平村公民館に保管されている。 出土遺物や古墳の状況から見て後期古墳であることは疑いのない事実である。現在、村史跡に指定されている。河東地区最北端の積石塚古墳として最も形の整っている古墳である。</p>
	<p>○高橋桂さんの調査報告からの抜粋 墳丘の規模は、水田耕作中、調査中に乱され、墳丘自体が変形しており、明確に円墳状を呈しているために不明である。 <考察>※ここと栗古墳、鬼の釜古墳についても触れた内容 三古墳を合わせて(調査を)すすめたい。岳北地方の古墳の数はいたって少なく、規模もまた小である。そして、時代的にも一部を除いては古墳時代の後期にほとんどが所属している。古墳の形状も円墳が主体である。千曲川をはさんで、河東地区と河西地区を見た場合、河西地区の古墳はほとんどが土盛古墳であり、積石塚古墳としてよいのは、飯山市秋津五里久保に一基あるのみである。 積石塚古墳は、長野県では松代を中心としたところに集中的に認められている。そしてこの積石塚古墳は帰化人の手によって造成されたとされている。 木島平の以上の三基は、一部不明とはいえ、積石塚古墳と考えて間違いないものであり、長野県積石塚分布の最北端にあたっている。したがって、積石塚古墳の歴史的意义を考える上に重要な意味をもっている。 <保存の要件> 三古墳とも破壊の度合いが若いので、復元できる場所は復元する必要がある。また周辺の場所を整備し、古墳の破壊がこれ以上進行するのを防止することが必要であろう。</p>
<p>○「木島平村指定文化財(村宝)」より 南鴨の東側の小さな林の中にあります。その林周辺は木島平の豊かな田んぼを見下すことのできる眺めのよい場所でもあります。ここもすでに壊され大きな石がむき出しになっています。 石の室の大きさは長さ3.2m、幅0.85mあります。横穴式の部屋と考えられますが、残っているのは石の室の主な部分だけでありはっきりとわかりません。近くにも古墳と思われるものが1ヶ所あります。もともとは石の室のまわりにたくさんの石が積み上げられていたのですが、完全にこわされているため元のその大きさ、形はわかりません。まわりには石だけがあることから、古墳であることは間違いないと思われます。</p> <p>○木島平村誌からの抜粋 馬曲川扇状地扇中央部に位置する。古墳の北側に小さな沢が流れている。往郷地区南鴨部落の上方にあって、西側~馬曲川扇状地の扇端面から木島の低湿地帯を望むことのできる景勝地に立地している。古墳の所在地は現在墓地となっている。 古墳は、破壊の度合いが甚だしく、石室の一部が残存しているのみである。石室は、横穴式石室で現長3.2メートル、幅0.8メートルである。墳丘が全く破壊されているので確たることはいえないが、朝日ゴウロ古墳と同様に積石塚古墳であろう。遺物は出土したのかどうか不明である。この古墳により10メートルほど距てて積石塚古墳とおぼしきものが一基認められる。鬼の釜古墳は村指定史跡となっているが、破壊の度合いが強いため、今後とも厳重に管理する必要がある。</p> <p>○調査書からの抜粋 鬼の釜古墳は泉龍寺大門の北方2~3丁の所にあるが、墳丘が全部崩れ去って、石室が露出している。石室の上をおおっている大きな平石がかまどのように見えるので、鬼の釜とよばれたのであろう。この村の近くには神戸の銀杏の木に西南に飯綱堂の古墳があり、安田にも其綿にも古墳の群があり、飯山の有尾にはこの地方に珍しい前方後円墳がある。これらの古墳は、何れもその昔、おそらくは1200~1300年も前、都からエゾ征伐に下った將軍とか、この地方を治めた役人とかあるいは地方の豪族とかの墓であったろうと思われる。直接血が繋がっていないにしてもこの土地には縁故の深い人々である。古墳も先祖の墓と同じに丁寧に扱いたいものである。</p>	<p style="text-align: center;">史跡 (指定番号第2号) 鬼の釜古墳</p> <p>所在地： 大字往郷字道端 1078 指定年月日： 昭和45年11月3日</p> 

<p style="text-align: center;">史跡 (指定番号第8号) 和栗古墳</p>	<p>○「木島平村指定文化財(村宝)」より 古墳は、和栗の東(山側)の畑の中にあります。壊されて大きな石がむき出しになっていて、もとの形はまったくわかりません。石のへやは手と手を合わせたような形(合掌形)をしており、大きさは長さ3.7m、幅1.5m、高さ0.85mあります。だいぶ前に調べられ、きれいな玉、弓矢の先につける矢尻、馬の道具、土器などが発見されました。県の宝として指定されたこともあります。</p>
<p>所在地： 大字穂高字岩下137 指定年月日： 昭和54年11月12日</p>	<p>○木島平村誌からの抜粋 和栗部落上方の小扇状地地形の扇端部上端に位置している。この小扇状地状地形は、和栗部落付近で崖状をまして烏川扇状地の扇端面に連なっている。従って、木島平北端の肥沃な水田地帯を望む場所にこの古墳が築造されている。墳丘は破壊されてしまって全く認められない。おそらく積石塚の円墳であっただろう。石室が露出している。石室は合掌形を呈しており、かつて長野県史跡に指定されていた。石室は、現長3.70メートル、幅1.50メートル、高さ0.85メートルである。</p>
	<p>勾玉・管玉・切子玉・直刀3・馬具・馬鐸・土師器・須恵器等多量の遺物が出土している。現在、村史跡に指定されている。畑中にあるため畑耕作中に出る礫が石室内に投げ込まれ、石室はこれらの礫で埋もれてしまっている。早急に石室内の礫を取り除き、完全な保護対策を講じる必要がある。</p> <p>○調査書からの抜粋 和栗の小字岩下という地籍の畑の中にあつて、付近には安山岩質の角礫が豊富にあるところである。部落の人の話によると大正14年頃に部落の人達が岩石を採取した折、積石の下から内部構造と遺物が出てきたという。付近の自然石を使った積石塚であったと思われるが、現在はわずかに石室の残骸がむざんな姿をさらしている。この積石塚は付近で自然石をたやすく手に入れられるので、石塊だけで築いたもの。</p> <p>側壁は省略され、2枚の安山岩を両側からあわせた屋根形につくったもので、もっとも簡単な造りである。内規は底部の幅約1.3メートル奥行はおよそ3メートル、高さは85センチメートルで入口は南側と思われる。積石塚は古代朝鮮からの帰化人によって築造されたものであろうということが実証的ではないものであって粗末品であることがあげられる。和栗の積石塚が帰化人といかにかかわりあいをもっているのであろうか。和栗積石塚からの出土副葬品は、直刀4、鉄鏃数個、馬具のクツワ1、銅鐸1、勾玉、管玉、切子玉、土器、土師器など1部は北部小学校に保存されている。築造年代について小野勝年先生は6世紀後半以前にさかのぼるであろうとされている。</p>
<p>○「木島平村指定文化財(村宝)」より 和栗の東方、飯山市との境に萬仏山(高さ1272.7m)から西方にのびる尾根の突端にある城山(863.7m)が犬飼城跡です。「城の峰」とも呼ばれています。本郭(城の中心)の平らな部分は30m×30mの広さがあり、北側に高さ2m～5mの大きな土塁があります。</p> <p>本郭より東方へ上る尾根には5条の空堀(水のない堀)が設けられています。北側は急傾斜で、尾根へ西方と南方にさがっています。西方は本郭に接して深さ5m、幅2m、長さ36mの一条の空堀があるだけです。南方に延びる尾根の傾斜は比較的ゆるやかで、45mくだると深さ5m、幅4m、長さ25mの空堀があります。さらに下方には深さ2m以下の浅い空堀が5条ほどあり、ところどころに人工的に大きな石を置いたように見えます。この尾根は稻荷の稻泉寺に続いています。</p> <p>本郭からは中世(鎌倉～室町時代)の陶器類、鞍物の炭化物が発見されています。ここからは木島平、飯山市方面が見渡され、眺めはこの地方随一です。山城の規模は雄大であり、まさに犬飼郷の主城にふさわしいものといえましょう。</p>	<p style="text-align: center;">史跡 (指定番号第13号) 犬飼城跡</p> <p>所在地： 大字穂高2163-3 指定年月日： 昭和56年8月18日</p> 
<p style="text-align: center;">史跡 (指定番号第14号) 平沢城跡</p> <p>所在地： 大字往郷平沢城平6003-1 指定年月日： 昭和56年8月18日</p> 	<p>○「木島平村指定文化財(村宝)」より 平沢の戸立岩方面から登っていくと鞍部(尾根の低くなったところ)にでます。尾根づたい50mほど登ると老松のあるこの城跡にでます。これが第3郭で、広さは約65㎡あります。ここは城跡の最も高いところで、馬曲の集落を眼下に眺めることができます。</p> <p>尾根を30m下ると大空堀をめぐらした第2の郭にでます。周囲に高さ1mほどの土塁をめぐらし、広さは約165㎡の平らなところです。これから20mくらい下がると、深さ3m、幅5mほどの3条の大空堀で備えを固めた本郭にでます。広さは約200㎡で、眺めが良く「義仲従士の碑」と刻んだ石碑が建っています。本郭の南側に2段になった段郭があります。南西の尾根を下ると、ところどころに石積があり、また小さな空堀も2条あります。さらに30mほど下ると尾根の先端にでます。そこには4段の石積が見られ、眺めの良い平らな地です。沢に下ると牛池といわれる池があり、平沢城水の手(飲料水)だった池です。</p>


史跡 (指定番号第26号) 日向城跡	<p>この日向城跡は、城蔵山（標高 1569m）南西の尾根上にあり、標高 650mの通称ヒナタといわれるところです。林道カヤの平線から 300mほど登ったところにあります。</p> <p>山城の遺構は本郭と本郭の周囲にめぐらした深い空堀だけです。これを単郭といいます。本郭の大きさは、南北約 27.5m、東西 23.5m、面積約 650 m²で、北方の周辺には長さ 15m、高さ 1.4m、上幅 3.3mの土塁が築かれています。本郭は 2段となっており、上段は約 250 m²、下段は約 400 m²あります。</p> <p>本郭は十数本のナラやカラマツの成木のほかは、一面の雑木で覆われています。中央に「日向城跡」の標柱が建てられており、いたるところに風倒木が目につきます。</p>
所在地： 大字往郷 6819 の 26 小字 大林 指定年月日： 昭和 60 年 1 月 5 日	
 <p>日向城</p>	

<p>部谷沢城跡は、大久保沢と小樽川の間東西に伸びる尾根にあります。南側と北側は急な斜面で、とくに南面の斜面はけわしくなっています。標高は 600m～650mで、先端から終わりまでの長さは 1455mもあります。</p> <p>城跡の遺構は、尾根を削って平にした 10 段の小郭があります。各段の間は約 10mで、小郭の広さは南北約 10m、東西約 3 mで比較的小さなものです。とりわけ広い平地はありませんが、4 段～5 段の間には大きな段になっており、やや広い小郭となっています。</p> <p>10 段目から約 100m登ったところにある、南北 8 m、幅 6 m、深さ 1.3mの大空堀が部谷沢城のはずれになります。なお、尾根の途中で南側へ 5 mさがったところに小郭が一つあります。</p> <p>言い伝えによると水の手（飲用水）は、大久保沢の中ほどにありましたが、現在は地下に沈んで見られません。なお、大久保沢の入口近くに「コイトの畑」という地名があります。「垣内」が「コイト」になまったもので、部谷沢城を守る侍たちの屋敷のあったところだったと思われます。また、ここを開墾したとき、多くの土器の破片が発見されています。</p>	史跡 (指定番号第39号) 部谷沢城跡
所在地： 大字往郷（部谷沢） 指定年月日： 平成元年 4 月 1 日	
	

史跡 (指定番号第46号) 根塚遺跡	<p>根塚遺跡は、平成 7 年度から平成 11 年度にかけての県営担い手育成基盤整備事業で大区画ほ場整備を計画した際、その区域内に存在しました。このため事業に先立ち遺跡の記録保存を図ることとしました。</p> <p>遺跡は東西 105m、南北 58m、標高 329.66mの自然残丘で、現水田との標高差は 7～10mです。表面積は 3,500 m²ほどです。この遺跡からは、鉄剣や土器、ガラス小玉など縄文時代、弥生時代の出土品が多くあり、特に鉄剣は東アジアで初めて出土した遺跡として、長野県、東国というより全国的な遺跡であります。</p> <p>根塚周辺の積石塚の分布状態からも、根塚の石積は人為的に河原石を運びあげて築造したものであり、積石塚の可能性もあります。根塚全体の中で鉄剣の意味を考えるとともに、近くに位置する渡来系の要素の強い朝日ゴウロ古墳や合掌形石室の和栗古墳との関係も考慮にいれ、周辺の古墳群との関係で考えなければなりません。また、遺跡の重要性を考え遺跡全体をできるだけ原形のまま保護する必要があります。</p>
所在地： 大字往郷 229-イ（根塚） 指定年月日： 平成 9 年 4 月 14 日	
	

<p>名勝 (指定番号第18号) 蜘蛛ガ淵</p>	<p>馬曲の集落から谷川に沿って登っていきますと、左右の山は次第に険しく迫り立ち、川の音は一段と峻烈に響いて辺りにこだまします。往郷民謡にはこの淵を「聞いておそろしあ蜘蛛ガ淵、見ては美し岩間ふじ」の一節があります。</p> <p>昔、きこりが蜘蛛に襲われ、ようやく助かったことの言い伝えもありますが、それとは別に木曾義仲がこの辺りを通ったときに、重臣がこの溪谷にさしかかり、美しい神秘的なこの瀑布(たき)の景観に足を止めて眺めていました。「ああ、なんとすばらしい眺めであろう」と、ふと感じ入ったとたん、足を滑らして深い滝壺に落ち込んでしまいました。このとき、どこからか突如一匹の大蜘蛛が、糸を操りながら滝壺めがけて下りてきました。そうして滝壺に落ちこみもがいている重臣を苦も無く助けたということです。命拾いした重臣がほっとする間もなく、大蜘蛛の姿はいずこともなく消え失せてしまった。</p> <p>これより後、瀑布を「蜘蛛ガ淵」と呼ぶようになったといえます。</p> <p>蜘蛛の糸に関係した全国の伝説では、深い淵で釣りをしていた人や旅人の足に、蜘蛛が糸を巻きつけて淵に引き込もうとし、これに気づいて、その糸をそばの大木に巻きつけ、大木が淵に引き込まれて命拾いをしたという伝説が多い。木島平の蜘蛛ガ淵の蜘蛛のように、人を助けるという伝説は珍しいもので、この淵の美しさと、地域住民の心のやさしさがこのような伝説にしたのでしょう。伝説はそのように、所が変わり、そこの住民が変わると内容が変化するものなのです。</p>
<p>所在地： 大字往郷 5089 のハ ほか 指定年月日： 昭和 60 年 1 月 5 日</p>	
	

<p>樽滝の樽川上流に不動明王をまつる神社があります。そのすぐ下流にある滝が雄滝で、さらにそのすぐ下流にある滝が雌滝です。昔から上木島と往郷の境にあり、両村の言い伝えが村歌、和歌、俳句などに詠まれています。昔、柏尾(飯山市柏尾)から大きなへびがこの雄滝に移り雨乞い(雨が降るようにお願いすること)をして干害から救った伝説も残っています。</p> <p>こうして戦前まで5月8日には滝を見るため近村から多くの人々が集まり、すぐそばにある不動明王にお参りをし、村民のいこいの場でもありました。この滝の兩岸の岩と、北東に生えるケヤキの自然林は滝の美しさを一段と高めています。</p>	<p>名勝 (指定番号第19号) 雄滝・雌滝</p>
 <p style="text-align: center;">雄滝</p>  <p style="text-align: center;">雌滝</p>	<p>所在地： 樽川上流 指定年月日： 昭和 60 年 1 月 5 日</p>

<p>天然記念物 (指定番号第3号) 鞍掛けの梨</p>	<p>○「木島平村指定文化財(村宝)」より この梨の木は馬曲から東へ約 500m、観音堂とよばれている所にあります。崖下には馬曲川が流れています。樹齢(木の年齢)はおよそ 500 年以上と思われます。大きさは高さ 12m、太さ 4m、枝の広がり 14m あります。植物学上の分類ではミチノクナシといい、奥羽地方(東北地方)、北陸地方、長野県に分布する自生ナシです。昔、平安時代の末期に木曾で育ち後に敵の平氏を討討して京都に上り、征夷大將軍になった木曾義仲という人がいました。義仲は元服して兵を挙げ、北信の地域で勢力を拡大したとき木島平方面を通ったと思われます。馬曲の鞍掛けの梨の木は、そのとき兵を休めようとして馬の鞍をこの木に掛け、岳北の幽玄な霊山の連峰を眺め鋭気を養ったといわれています。有名な大木の中で「鞍掛けの松」というのは、全国のところどころにあります、その特色は馬の鞍を掛けるのに適した形をしています。ただ、その木は松であり、馬曲のように梨の木であるのは珍しいことです。</p> <p>○「木島平村誌」より 馬曲部落上から東方約 500 メートル位のところにある観音堂地籍の馬曲川に面したがけの上によく茂った梨の古木がある。これが「鞍掛けの梨」である。樹種ヤマナシ、樹高 12 メートル、目通り周囲 4 メートル、枝張り 14 メートル、樹齢推定 500 年以上。昔、木曾義仲が平家討伐に向かう途中、馬の鞍をこの木の枝にかけて休んだという云い伝えによってこの名前がついていて、昔から地域の人々に親しまれ、愛されてきた木である。秋 10 月中旬には径 4 センチメートル前後の実がたくさん結実しているのがみられる。味がよくないので、食用には不適である。年によって結実の多少がみられるが、土地の古老の言によれば、実がつく年は風が強く吹くという云い伝えがある。ただ、この木は老衰して枝葉も新しく茂る力より、雪や雷によるいたみがひどく、幹なども内側は腐食してウツロになっていて、横から見ると扁平になっている。</p>
<p>所在地： 大字往郷観音堂 指定年月日： 昭和 45 年 11 月 3 日</p>	
	

天然記念物

(指定番号第5号)

稲泉寺の松並木

所在地:

大字穂高 858 稲泉寺門前

指定年月日:

昭和 47 年 11 月 15 日



○「木島平村指定文化財(村宝)」より

中村より農林高校を過ぎてだらだら坂を登りつめて、稲荷の入口に至ると、昼なおうす暗い大木の松並木がある。これは天正年間に開山された稲泉寺の門前並木として植えられたもので、樹齢 300 年を越えているという。樹高 18~25m (高いもの)、目通り約 4 m (太いもの) もある。樹種は赤松。

門前より約 300m 位の間に 50 本ほどの大木がそびえて立ち並んでいたのが、雪のためであろう一本倒れ二本倒れ、指定された当時は 12 本ありましたが、マツクイムシなどの被害にもあい、今は 3 本しか残っていません。雪の多いこの地方には大きな赤松の木が並んでいる所はなく、大切に残していくことが望まれています。

○木島平村誌からの抜粋

中村より農林高校を過ぎてだらだら坂を登りつめて、稲荷部落の入口に至ると、昼なお薄暗い大木の松並木がある。これは天正年間に開山された稲泉寺の門前並木として間もなく植えられたもので、樹齢 300 年を越えているという。

門前より約 300 メートル位の間に 50 本程の大木がそびえて立ち並んでいたのが、雪のためであろう 1 本倒れ、2 本倒れして現在では 10 本だけである。これだけの松並木は県内にも他に類例がなく貴重なものである。

樹高 18~25 メートル、目通り太いもので約 4 メートル・平均では約 3 メートルである。樹種は赤松。

○「木島平村指定文化財(村宝)」より

昔、秋葉三尺坊というえらいお坊さんが神戸(今の飯山市神戸)より神戸のイチョウの枝をツエとして持ち帰り、この地にさしたのがこの木であると言われていました。その時さかさにさしたので下より上が太く、さかさイチョウとも言われています。(伝説)

和栗の長光寺では、このえらいお坊さまをおまつりする木として、火災から家を守るありがたい仏さまとして、毎年お札を印刷して信者に分けています(現在長光寺には住職がいないため行ってない)。県下最大の大木には、太さ約 11m の神戸のイチョウ、松本市入山辺の千手のイチョウ、東筑摩郡生坂村の乳房イチョウ、長野市吉田のイチョウ(太さ約 8.6m)があります。この和栗のイチョウも、上に書いた長野県内の大きなイチョウも全て雄株で、樹齢は大きいもので約 600 年と言われていました。

○木島平村誌からの抜粋

樹高 35 メートル。樹齢推定 700 年、太さ・目通り周囲 9 メートル、地上 2 メートルで周囲約 12 メートル。逆さ大イチョウとよばれている。遠州秋葉山の三尺坊が、神戸の良蔵坊の坊主であった頃、その境内にある荒神の側に植えたのが現在の神戸の大イチョウである。

後に、三尺坊がある雪の日に、そのイチョウの枝を折って杖にして和栗長光寺を訪れたという。その時、その枝を忘れて帰ったが、それが活着して成長したのが今の長光寺の大イチョウとなったという。また、一説には秋葉山の三尺坊が来て、神戸の大イチョウの枝を折ってきて植えたという話もある。

この木は「逆さイチョウ」ともいわれ、枝がすんなり上に伸びないで、一度は下に向きそれから陽光むかったようなぎこちない枝振りである。それは三尺坊が杖にしてきたものを逆さにさしていったからだといわれている。イチョウは雌雄異株で、この木は神戸の大イチョウと同様、雄株で実はつかないが、10 里四方に花粉が風に乗って散り、雌株に受粉されて結実するのに役立っているといわれている。

天然記念物

(指定番号第6号)

大イチョウ

所在地:

大字穂高 458 長光寺境内

指定年月日:

昭和 47 年 11 月 15 日



天然記念物

(指定番号第20号)

天然寺寺叢

所在地:

大字上木島 3336 のイ

指定年月日:

昭和 60 年 1 月 5 日





中町の天然寺門前には、美しい杉並木(太さ約 3.25m、高さ 32.2m)がつづき、さらに本堂前庭にはコウヤマキの大木(太さ約 2.8m、高さ 30.0m)があります。ともに樹齢約 250 年です。


天然寺は、古くは西町の山崎地籍にありましたが、水害にあい、中町の西小路地籍に移りました。その後も度々の火災風禍にあい、天正元年(1573)に現在地の西町・上原地籍に再建されました。しかし、寛永3年(1626)、寛延2年(1749)と2度の火災によって本堂などすべて焼失してしまい、現存の本堂はその後に建立されました。


今ある杉並木とコウヤマキは、そのような火災の後に植えられたものと考えられます。


<p>天然記念物 (指定番号第 2 1号) 泉龍寺寺叢</p>	<p>泉龍寺の門前には規則正しく並ぶ杉（太さ 2.87m、高さ 32.0m、太さ 1.6m以上のもの 18 本）、ケヤキ（太さ、2.87m、高さ 32.0m 2 本）、アカマツ（太さ 1.0 m、高さ 8.0m 13 本）があり、そして寺の庭にはオオボダイジュ、イトヒバ、ヒマラヤスギ、イチョウなどあります。</p>
<p>所在地： 大字往郷 3705 指定年月日： 昭和 60 年 1 月 5 日</p>	<p>泉龍寺は市川筑前守が天正 10 年（1582）寺に高石の土地を与えたので、長沢（原大沢）より高石に移り木も植えられました。明治 42 年庚から出た火災で土蔵と山門が燃えてなくなりました。幸い杉並木、松並木、ケヤキは燃えずに残りました。寺の庭の木は火事の後植えられたもので、お堂の立派さとあわせいっそう美しさを増しています。</p>
	
<p>中町の大龍寺参道には杉の大木（太さ 3.3m、高さ 34.4m、樹齢約 250 年）が 8 本あります。大龍寺は永禄 8 年（1565）に建てられ「応供山大龍寺」と名乗りました。また、「天正元年（1573）御朱印高二拾石九斗一升九合を以って寺領と定める。」とあることから、約 400 年の歴史がある寺院です。 戦後、道を広げるため 1 本切った時に計った年輪も、約 400 年近くあったということです。</p>	<p>天然記念物 (指定番号第 2 2号) 大龍寺の大杉</p>
	<p>所在地： 大字上木島 1569 指定年月日： 昭和 60 年 1 月 5 日</p>
	
<p>天然記念物 (指定番号第 2 3号) 馬曲のアスナロ</p>	<p>旧道より登ると馬曲の入り口に道祖神が祀られていて、そのそばに太さ 3.7m、高さ 25m、樹齢約 300 年の大きなアスナロの木が立っています。</p>
<p>所在地： 大字往郷 5156 の 1 小字 泊石 指定年月日： 昭和 60 年 1 月 5 日</p>	<p>道祖神は、神さまや仏さまを信仰することが盛んな時代、あらゆる病気や悪い霊が村内に入るのを防ぎ、旅の安全を祈る神として祀られました。そのそばに神が宿る木としてアスナロの木を植え、荘厳さを保ってきました。また道祖神祭りは昔から子どもたちの祭りとして受け継がれてきました。 特に病弱の子どもが健康になった例も多く、そのために遠方からもお参りする者が多かったと言われています。</p>
	


天然記念物 (指定番号第24号) カヤの平北湿原 (北ドブ)	<p>標高 1500m のカヤの平高原に、面積 7ヘクタールの湿原があります。</p> <p>この北湿原にはアオモリミズゴケが最も多く、ホソミズゴケ、ヒメミズゴケ、ワタミズゴケなどもあり、ごくわずかウロコミズゴケ、ユガミミズゴケなども見られる県下第一級の高層湿原です。</p> <p>モウセンゴケ、イワショウブ、タテヤマリンドウ、アサヒラン、ウメバチソウなどのほか、ミズギク、オオバタチツボスミレ、チシマウスバスミレやイワイチヨウなどの珍品も見られ、初夏にはニッコウキスゲの花が美しく、動物ではクロサンショウウオの産卵も見られます。</p>
所在地： 大字上木島宇木島山 指定年月日： 昭和 60 年 1 月 5 日	
	


<p>北湿原より南にあり、やや標高が低い (1420m) 場所にある湿原で、北湿より面積も小さく 0.5 ヘクタールです。</p> <p>ミズバショウがよく育成し、その花期にはリュウキンカの花も見られ、付近の高まった場所にはオクチョウジザクラも多く、これらは北湿原 (北ドブ) と違う点ですが、ミズギク、モウセンゴケ、オオバタチツボスミレなどのある点は同じです。</p> <p>なお、近くの牧場跡地や小さい凹地にはエゾノミツモトソウやエゾエンゴサク、ギョウジャニンニクや有毒植物でもあるコバイケソウなども見られます。</p>	天然記念物 (指定番号第25号) カヤの平南湿原 (南ドブ)
	所在地： 大字上木島宇木島山 指定年月日： 昭和 60 年 1 月 5 日
	


天然記念物 (指定番号第36号) 巢鷹八幡のブナの巨木	<p>部谷沢の巢鷹八幡社の入口にあたるブナの木は、太さ 3.14m、高さ 30m の大木です。巢鷹八幡社の巢鷹というのは、鷹の子を捕獲する巢鷹山とつながりがあって名付けられました。</p> <p>志賀高原から計見・野沢・志久見へ続く奥山は、古くから鷹が巣をかけて雛を育てる森林でした。一番古い記録では、今から 750 年ほど前の鎌倉時代、寛喜元年 (1229 年) 志久見山 (栄村) の地頭中野能成は、木島山の地頭木島兵衛尉が鷹の子 4 羽盗んだと鎌倉幕府に訴え出ました。木島氏は鷹の子を捕らえた山は毛見氏の領地であると主張しました。そこで毛見郷の地頭毛見実綱に聞いたところ、そこは毛見氏の領地ではないと証言しました。このため守護北条重時は、木島氏に鷹の子を返すよう命じる判決を下しました。</p> <p>江戸時代になって松平忠輝は、慶長 12 年 (1607) 沓野山に巢鷹山を設けて、11 人の巢守衆に管理させました。つづいて慶長 18 年志久見山にも巢鷹山を設けました。10 人の巢守衆をおき、110 石の手当を与えて取り締まらせました。元和 5 年 (1619 年) 12 月、木島平に領地を持つ岩城貞隆は、沓野山と志久見山の間にある野沢山に東西 13 里、南北 8 里の広い巢鷹山を設けました。そして 10 人の巢守衆に、巢鷹山への入山をさせないこと。巢から鷹をつかまえて殿様に差し出すように命じました。そのため、鷹が巣をつくる時期に、野沢・馬曲・計見・木島 4 か村の巢鷹山への登山口へ、立入り禁止の立札をたてさせました。計見山の登山口は巢鷹八幡社で、ここに立札を立てさせたことから巢鷹神社と呼ぶようになりました。このような史跡にあるブナの巨木は、我々に巢鷹にまつわる様々な史実を語りかけてくれます。</p>
所在地： 大字往郷 (部谷沢) 指定年月日： 昭和 62 年 2 月 19 日	
	


天然記念物 (指定番号第 37号) 御魂山の神代桜	<p>御魂山にある桜の老木、植物学の分類ではエドヒガンといいます。太さは 4.52 m、高さは 26mあります。樹齢は約 400 年と思われます。春の雪消えには他の桜よりひとあし早く可憐な花をつけた神代桜は、松の緑にはえて美しい。</p> <p>エドヒガンは別にアズマヒガン、ウバヒガンの名もあり、長野県内で見られるサクラ類では最も老木のサクラです。</p>
所在地： 大字往郷字大沢入 6515-4 指定年月日： 昭和 62 年 2 月 19 日	
	


天然記念物 (指定番号第 41号) 西小路シダレザクラ	<p>西小路の歯科診療所のとなりに植えられている桜です。太さ 2.83m、高さ約 20 m、あります。枝張りは東 3.4m、西 7.3m、北 4.1m、南 8.3mあります。樹齢も約 300 年と思われる古い木であり、シダレザクラとしては村の中でも一番大きな木です。昔の往郷村役場があった場所の銘木であるので、永く村民の親しむものとして保存したい。</p>
所在地： 大字往郷 2976-14 指定年月日： 平成 5 年 4 月 16 日	


天然記念物 (指定番号第 42号) 浄蓮寺のボダイジュ	<p>中村の浄蓮寺の本堂北側にあるシナノ木科の大木です。太さ 2.25m、高さ 18 m、枝張り東 6.0m、西 6.5m、北 7.5m、南 4.0mです。</p> <p>ボダイジュ（菩提樹）の名前は、仏教聖地のインドボダイジュ（クワ科イチジク属）に葉の形が似ているので、中国でつけられた名前です。このシナノ木科のボダイジュは、中国ではお寺に多いといいます。お坊さんの栄西という人が中国天台宗の寺でこの木を見て、日本に帰るときこの種を持ち帰って（1191 年）、奈良の東大寺に植えたと言います。</p> <p>以来日本の多くのお寺でこの木を植えたと言います。中野市、下高井では中野市竹原の専福寺にもありますが、それよりも樹齢（昭和 55 年発行の木島平村誌には樹齢推定 180 年とある）も多く、木も大きい。長野市信大附属長野小学校の校庭にもあるが、それよりも大きい。（長野のものは旧県立長野中学校－現長野高校の時代から移植されていたものです。）</p> <p>このように、仏教に関係が深い木で、この地域では数が少ないので、大切に保護することが必要であると思われます。</p>
所在地： 大字穂高 2970 指定年月日： 平成 5 年 4 月 16 日	
	


天然記念物 (指定番号第43号) 龍興寺清水	<p>内山の公民館の横、標高441.5mにあります。 平成5年11月15日午後2時(晴)のときに調査した結果は、気温19.2℃、水温10.4℃、水深は62cmとなっています。</p> <p>言い伝えによると、昔、有名な弘法大師が日本中まわっていたとき、この内山に立ち寄りました。そのとき杖を突き立て村人に「水が欲しいか、お湯が欲しいか」とお聞きになり、村人が「水が欲しい」と答えたら数日してここに清水がわき出したと言います。村人はこの清水を弘法清水と呼んで大切に守ってきました。弘法大師は、亡くなってからの名前で、生きておられる時は空海と言いました。真言宗をお聞きになり、奈良県の高野山にお寺(金剛峯寺)を建てられた人です。内山のこの場所に治承年間(1177~1181)、見龍というお坊さんが寺を建てられましたが、山くずれでお寺がなくなりました。天文元年(1532)、この泉屋敷に住んでいた土地の豪族壁和泉守が土地を贈って寺をふたたび建てましたが、弘治2年(1556)、また山くずれにあいなくなりました。慶長2年(1597)、得応というお坊さんが三たび建て、名前を龍興寺に改めました。以来この清水は龍興寺清水と呼ばれています。その後この水を利用して寛文元年(1661)萩原喜右衛門(1642~1705)が紙すきを始め、内山紙と名づけ、広く知られるようになりました。以来この地方の一大産業として昭和時代前期までコウゾ、ノリウツギを使い内山紙が作られてきました。この間、この地方に疫病が流行して困っている時、仏さま(大日如来)をまつればなおると聞き、大日如来をまつり、このころから信仰に関係の深い柱松子が内山に始まり今日まで続いて来ています。内山集落はこの龍興寺清水によって栄え、ありがたい弘法大師の話として代々語り継がれて来ています。</p> <p>萩原喜右衛門は青年時代、伊勢へのお参りに行くとき、美濃の牧谷という所で紙の製造法を覚えたと言います。喜右衛門は宝永2年(1705)11月19日、63歳で亡くなりました。喜右衛門の生家は今は内山にありません。</p>
所在地: 大字穂高1282-4 指定年月日: 平成6年4月25日	
	


<p>南鴨の豊足穂神社にあるケヤキは胸高幹囲が575cmで、知見の限り木島平村内では一番太く、しかも姿形が整って、樹勢もよいです。木島平村のシンボルは、花はフクジュソウ、木はケヤキとなっています。</p>	天然記念物 (指定番号第53号) 豊足穂神社のケヤキ
	所在地: 大字往郷1015-2 指定年月日: 平成16年4月16日
	


天然記念物 (指定番号第54号) 内山のカヤ	<p>カヤ(方言ガヤ)は県内では中部・東部・南部に自生し、北部のものはたいてい栽植されたものです。しかし、明治14年(1881年)往郷村が県令大野誠に提出した地誌には「カヤ之平山…嶺上にカヤの大樹あり、枝葉繁茂す…」の記事があり、嶺上を以って上木島村と境界としていたので境木として珍しいカヤの木を植えていた可能性もあります。(カヤの平の地名にも係わる)</p> <p>このカヤは以前(所有者山浦治元氏の親の代にはすでにあつた)屋敷林として防火・防風・果実利用を目的に植えられたものと考えられますが、胸高幹囲が180cm、樹高推定8mもあつて、この地方では珍しいものであります。</p>
所在地: 大字穂高1470 指定年月日: 平成16年4月16日	
	


有形文化財 (指定番号第34号) 木像十一面観音坐像	<p>大町の照明寺にある仏さまの像です。木を彫って色が塗られていましたが、今はどんな色が塗られていたかわかりません。仏さまは座禅を組んでいらっしゃいます。衣には細かな文様がつけられ、お顔は困っている人全部を助けようと願っている様子を現しています。特に眼は開くでもなく、閉じるでもない半分開いた半眼という眼をしていらっしゃいます。これは物事を深く感じとり、自分の意識を四方八方に広げている姿を現しています。そのお手は左手に水がめを持ち、右手は手のひらを見せて軽く下にたれていらっしゃいます。仏さまは蓮の台の上にお座りになっています。後の時代になってなおされていますが、仏さまは昔のままです。ただ、残念なことに冠(かんむり)の上にある十面の仏さまはたび重なる火事でなくなってしまいました。</p> <p>お寺の言い伝えでは医王山照明寺は、元は倉沢という所にあったのですが、和尚さまがいなくなったり、火事になったりして荒れていました。そのころに市川筑前守という人がお寺を新しく建て直し、洪の温泉寺というお寺から禅翁伝悦和尚さまを招き、新たに曹洞宗のお寺としました。この時のお寺の本尊さまとして市川筑前守が守り本尊としていたこの仏さまを照明寺に納めたのです。以来ずっとお寺の本尊さまとしてそんけいされています。</p>
所在地： 大字上木島 1972-1 (照明寺) 指定年月日： 昭和 62 年 2 月 19 日	
	

<p>原大沢の御魂山に石碑(石に文字を刻んで建てたもの)があります。明治 37 年～38 年(1904～1905)日本とロシアとの間に戦いがありました(日露戦争)。この戦いで村でも 5 名の方が亡くなりました。この方々の霊をなぐさめまつるために明治 45 年(1912)に建てられました。石に刻まれた文字のもとになったのが忠魂碑銘です。大きさは縦 230 cm、横 100 cm で内山紙に書かれています。そして縦 306 cm、横 115 cm のドンスという生地を使い掛軸になっています。</p> <p>明治 44 年、当時村の軍人分会の初代会長であった池田泰治氏(市之割)は、日露戦争の時の上官であった長岡將軍を通して乃木將軍にお願いして書いてもらいました。乃木將軍は名を希典といい、日露戦争を勝利に導いた英雄でした。この書を入れた箱のふたには「乃木將軍が書いたもの」と書かれ、また、箱の裏には「明治 44 年初代の軍人分会長池田泰治のときに乃木將軍にお願いして書いてもらったもので、記念に往郷小学校に贈った」と書かれています。</p>	有形文化財 (指定番号第35号) 忠魂碑銘
所在地： 大字往郷 3705-イ (村民会館) 指定年月日： 昭和 62 年 2 月 19 日	
	

有形文化財 (指定番号第40号) 長坂家所蔵文書	<p>大持坂新田の中ノ橋は上木島村に入るのか夜間瀬村に入るのかで争い、幕府に訴えました。幕府は元禄 9 年(1696) 4 月 25 日、中ノ橋は夜間瀬村のものであると判決をくだし上木島村は負けてしまいました。</p> <p>中ノ橋が夜間瀬村分になると、その奥にある木島山の入会権と樽川の水利権も夜間瀬村分になるので、上木島村ばかりでなく木島平 18 か村は、山と用水を取り戻すため、ふたたび幕府に訴えることにしました。そこで木島平 18 か村は信望のある大町安国神社の祠官長坂織部に先頭に立つてもらったため、18 か村の名主の血判状を差し出してお願いしました。</p> <p>織部は木島山と樽川の水は、木島平 18 か村分だという証拠を探しまわりました。証拠になる書類、奥山は巢鷹山であることをもって、何回も江戸を往復しました。そして多くの苦勞を重ねた結果、元禄 11 年(1698) 5 月 25 日、幕府は木島平 18 か村分の言い分を認める判決をくだしました。</p> <p>長坂家には寛永年間から慶応年間までの、たくさんの古文書があります。そのなかから両村の訴訟事件に関する古文書に限定して、その全部を指定しました。</p> <p>そのほかにも次の文書が指定されています。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 深沢堰関係文書 明暦、元禄 3 点 (2) 上杉景勝書状 栗林肥前守宛 (3) 井伊直亮書状 松平飛騨守宛
所在地： ー 指定年月日： 平成 2 年 4 月 25 日	
	

有形文化財 (指定番号第47号) 鉄剣(2振)	<p>鉄剣2振は、平成8年度県営担い手育成基盤整備事業に先立ち行われた根塚遺跡の発掘調査により発見されました。共伴する土器より3世紀後半のものと考えられます。この時代のものとしてはきわめて長く、保存状態も良いです。なかでも2号剣は国内では現在のところ最長であり、また柄頭とサーベルの把先に渦巻文を有する国内唯一の剣であります。当時国内ではこのような剣を作る技術はなく、舶載品と考えるのが妥当と思われます。</p> <p>渦巻文は3世紀から7世紀にかけ韓国加耶地方に盛行しており、加耶地方からもたらされたものと考えられます。このように鉄剣2振は、単に木島平村というより、古代の日本と韓国との関係を考える上できわめて貴重であり、重文級の資料といえます。</p> <p>1号剣 長さ56cm、幅3.4cm、厚さ0.8cm</p>  <p>2号剣 長さ74cm、幅3.4cm、厚さ1.0cm</p> 
所在地： 大字往郷 914-6 指定年月日： 平成10年4月16日	

<p>西小路の満昌院に飾られている額のことです。江戸時代、日本では独自の数学「和算」が発展しました。算額は数学の問題の解き方を一般の人に知らせるために神社などに納められたものです。当時の数学は今の中学から高校程度のもので、この地方の学問の高さがうかがえます。木島平村には現在、8面の算額があり、全国的に見てもこの小さな村に8面の算額が存在しているのは非常に珍しいそうです。納めた方たちは次のとおりです。</p> <p>●満昌院 嘉永5年(1852年)1月 月岡湖梅</p>	有形文化財 (指定番号第51号) 算額
所在地： 大字往郷 2948 (満昌院) 指定年月日： 平成15年4月17日	

有形文化財 (指定番号第52号) 算額	<p>原大沢の天満宮に飾られている額のことです。ここには3面の額があります。江戸時代、日本では独自の数学「和算」が発展しました。算額は数学の問題の解き方を一般の人に知らせるために神社などに納められたものです。当時の数学は今の中学から高校程度のもので、この地方の学問の高さがうかがえます。木島平村には現在、8面の算額があり、全国的に見てもこの小さな村に8面の算額が存在しているのは非常に珍しいそうです。納めた方たちは次のとおりです。</p> <p>●天満宮 明治21年(1888年) 小林半治朗</p> <p>●天満宮 奉納年不明(2面) 小林重裕 小林廣吉</p>
所在地： 大字往郷(原大沢) 指定年月日： 平成15年4月17日	


有形民俗文化財 (指定番号第9号、10号) 算額	<p>○「木島平村指定文化財(村宝)」より</p> <p>中島の水穂神社と中村の一川谷大元神社に飾られている額のことです。算額は江戸時代に数学の問題の解き方を一般の人に知らせるために神社に納められたものです。当時の数学は今の中学から高校程度のもので、この地方の学問の高さがうかがえます。納めた方たちは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●水穂神社 寛政12年(1800年)1月 <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td>野口惣右衛門保敏</td> <td>計見村</td> </tr> <tr> <td>久保田三郎右衛門邦教</td> <td>藤沢村(飯山市)</td> </tr> <tr> <td>保坂甚右衛門信美</td> <td>越後大井平村</td> </tr> <tr> <td>中沢久四郎保光</td> <td>越後中深見村</td> </tr> <tr> <td>白川小右衛門勝直</td> <td>計見村</td> </tr> <tr> <td>本山要八宣智</td> <td>中村</td> </tr> <tr> <td>田中喜右衛門</td> <td>高石村</td> </tr> </table> ●一川谷大元神社文化8年(1811年)6月 <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td>本山与右衛門宣智</td> <td>中村</td> </tr> <tr> <td>土屋伝右衛門逸章</td> <td>北鴨原村</td> </tr> <tr> <td>依田理八恭重</td> <td>上新田村</td> </tr> <tr> <td>丸山惣右衛門扶章</td> <td>木島村</td> </tr> <tr> <td>古川伊三郎豊道</td> <td>小見村</td> </tr> <tr> <td>伊藤佐五右衛門豊常</td> <td>天神堂村</td> </tr> <tr> <td>村山市蔵恭風</td> <td>中村</td> </tr> </table> <p>○木島平村誌からの抜粋 P678~685を参照のこと。</p> <p>○木島平村誌からの抜粋 詳細は「文化財指定台帳」を参照のこと。</p>	野口惣右衛門保敏	計見村	久保田三郎右衛門邦教	藤沢村(飯山市)	保坂甚右衛門信美	越後大井平村	中沢久四郎保光	越後中深見村	白川小右衛門勝直	計見村	本山要八宣智	中村	田中喜右衛門	高石村	本山与右衛門宣智	中村	土屋伝右衛門逸章	北鴨原村	依田理八恭重	上新田村	丸山惣右衛門扶章	木島村	古川伊三郎豊道	小見村	伊藤佐五右衛門豊常	天神堂村	村山市蔵恭風	中村
野口惣右衛門保敏	計見村																												
久保田三郎右衛門邦教	藤沢村(飯山市)																												
保坂甚右衛門信美	越後大井平村																												
中沢久四郎保光	越後中深見村																												
白川小右衛門勝直	計見村																												
本山要八宣智	中村																												
田中喜右衛門	高石村																												
本山与右衛門宣智	中村																												
土屋伝右衛門逸章	北鴨原村																												
依田理八恭重	上新田村																												
丸山惣右衛門扶章	木島村																												
古川伊三郎豊道	小見村																												
伊藤佐五右衛門豊常	天神堂村																												
村山市蔵恭風	中村																												
有形民俗文化財 (指定番号第11号) 水車小屋	<p>○「木島平村指定文化財(村宝)」より</p> <p>昭和63年、馬曲にあったものを寄付していただき、馬曲温泉公園に移しました。馬曲の水車小屋は明治20年に建てられ、大正2年と昭和6年7月に修理されています。小屋は木造平屋建て、茅葺で間口5m、奥行3.8mあり、中は米つき、ワラたたき、石臼による粉すりに別れています。水車の大きさは直径2.6m、幅56cmあり、松材が使われています。米つきの棒は3mでナラの木でできしており、ワラ打ちとあわせて3本あります。</p> <p>馬曲地区には、明治時代に水車は15~16ありましたが、動力に電気を使うようになってからだんだんなくなり、今はこの水車のみとなりました。</p>																												




有形民俗文化財 (指定番号第11号) 水車小屋
<p>所在地： 大字往郷 馬曲温泉公園内</p> <p>指定年月日： 昭和54年11月12日</p>


有形民俗文化財 (指定番号第16号、17号) 西国街道の観音 坂東街道の観音	<p>西国街道は柳久保から池の平までの高社山中腹の旧道ぞいに33体、坂東街道は樽滝の上から山道を通り、千の平、糠塚、裏落合(山ノ内町)を通る沿道に20体あります。山ノ内町にある観音を合わせると合計100体にもなります。</p> <p>両街道の観音は発起人、世話人が木島平と山ノ内町の須賀川の地元の人たちです。それだけに、この地域の人たちの信仰集団(神仏を敬う集団)の熱心な観音信仰の結束の表れであることがうかがえます。</p> <p>観音信仰は、日本固有の民間信仰と結びついたもので、古いころからありました。平安時代の半ばには、京都、近畿地方の観光から起こり、鎌倉時代には三十三ヶ所の札所巡りの巡礼が盛んになり、「西国三十三ヶ所」が定められました。また埼玉県秩父地方に「秩父三十四ヶ所」もできて、百番観音としての札所ができました。特に人々にこの信仰が広まるようになったのは江戸時代に入ってからで、観音がその姿を三十三に変えて人間の苦悩を救ってくれると信じられ、また旅人の苦難を救助してくれるということからも、旅行するものにもあがめられました。ここの西国街道や坂東街道もかつては飯山地方の物資の輸送や人々の交通にとって大切な道でした。しかし、安全な道とは言えない点から、ここに旅人の安全を祈りました。その点から、民間信仰を考える上での数少ない貴重な民俗資料です。</p>
有形民俗文化財 (指定番号第16号、17号) 西国街道の観音 坂東街道の観音	<p>所在地： 第16号 坂口—池の平街道 第17号 坂口—糠塚街道</p> <p>指定年月日： 昭和54年11月12日</p>


<p>有形民俗文化財 (指定番号第27号) 妙高山入峰先達許可状と旗印</p> <p>所在地： 大字往郷 1207 (南鴨)</p> <p>指定年月日： 昭和 60 年 1 月 5 日</p>	<p>昔は妙高山へ登るためには領主よりの許可状(書)が必要であり、入山するときは旗をもって登りました。その時のものがいくつか村に残っています。指定番号第27号から30号までがそうです。</p> <p>所有者 土屋広芳 許可状 天正元年(1573年) 上杉謙信宛 宝永6年(1709年) 宝蔵院法印俊海 旗印 天正元年(1573年) 信濃国高井郡南鴨ヶ原村 土屋甚左衛門</p>	
<p>紺色の絹の布で、上に太陽と月が、下には2種類の仏さまが2体あざやかな色で書かれています。</p> <p>所有者 小林博治 明和3年(1766年) 信州高井郡上木島大町 小林源左ヱ門</p>	<p>有形民俗文化財 (指定番号第28号) 妙高山入峰先達旗印</p> <p>所在地： 大字上木島 1673 (大町)</p> <p>指定年月日： 昭和 60 年 1 月 5 日</p>	
<p>有形民俗文化財 (指定番号第29号) 妙高山入峰先達許可状</p> <p>所在地： 大字上木島 1577 のイ (中町)</p> <p>指定年月日： 昭和 60 年 1 月 5 日</p>	<p>所有者 仲山武夫 文政5年(1822年) 信州高井郡上木島中町村 仲山安之丞</p>	
<p>木綿の布に大きく「妙高山」、中央に仏さまをあざやかな色で美しく書かれており、そのまわりに「高井郡上木島構(講) 中先達仲山安之丞」と書かれています。</p> <p>所有者 仲山広茂</p>	<p>有形民俗文化財 (指定番号第30号) 妙高山入峰先達旗印</p> <p>所在地： 大字上木島 1435 (中町)</p> <p>指定年月日： 昭和 60 年 1 月 5 日</p>	
<p>有形民俗文化財 (指定番号第33号) 泉龍寺 市川筑前守に関する墓碑</p> <p>所在地： 大字往郷 3705 のイ (泉龍寺)</p> <p>指定年月日： 昭和 62 年 2 月 19 日</p> 	<p>戦国時代、上杉謙信と武田信玄が川中島で争っていたころ、木島平は豪族の市川氏が治めていました。市川氏は厚く仏教を敬い、木島平に三つのお寺(高石の泉龍寺、西小路の真宗寺、大町の照明寺)を建てました。</p> <p>高石の泉龍寺は市川房幸が建て、その周辺の荒地を開墾して田や畑を増やしました。泉龍寺にはこの房幸のお墓が残っています。お墓は宝篋印塔の形をしています。正面に蓮の実が浮き彫りにしてあり、横には「泉龍院殿月山宗圓大居士文禄三年甲午正月二十七日」と、戒名と亡くなった日を刻んであります。泉龍寺の言い伝えは、市川信房のお墓となっていますが、いっぽう釧路市に住んでいる市川氏の子孫の系図で見ると、信房の子房幸のお墓にあたります。彼は筑前守・藤若丸・新六郎ともよばれていました。文禄3年信房の孫勝房が7歳で市川家を継ぎました。長寿丸・新九郎と呼ばれ、叔父の為綱を相談相手とし、市川家を守っていました。彼は西小路の真宗寺を建てて厚く仏教を信仰しましたが、慶長10年(1605)18歳で亡くなりました。</p> <p>彼のお墓は真宗寺にあります。板状の墓石に「筑前守慶長十四年三月二十四日」と刻まれています。釧路市の市川家の系図によれば法名は「真宗院殿榮宗英居士」です。両方のお墓は泉龍寺ならびに真宗寺が建てられたいわれを知る上で貴重なものです。</p>	

有形民俗文化財 (指定番号第38号) 高札	<p>高札(制札)は室町時代から広く使われるようになったもので、江戸時代には全国にありました。高札場は、名主の家のそばや、村人の目に触れやすい主要道路の辻、または道端の広場に設け、そこに高札を掲げました。</p> <p>この高札を掲げることは、明治6年に廃止されましたが、それ以前までは村の政治に関したことや、幕府及び所領の大名の掟や法令などを、村人に達するものでありました。</p> <p>また、時には罪人の罪状などを公表して、住民のみせしめにも利用し、重要な役目を果たしました。したがって、これをこわしたものは重い刑に処せられたほどでした。</p> <p>書式は一定しており、題目、本人、年月、交付者の順に墨書されています。その内容は、キリシタン禁止に関したものの、毒薬、駄賃、火付け(火事場)などにわたったものであり、字体は草行の仮名まじりの書体が用いられました。</p> <p>この高札は、庶民の生活資料としても重要なものでありました。またその地域の過去の生活を調べていく上でも大切なものであります。</p>
所在地: 大字上木島(大町)	
指定年月日: 昭和62年2月19日	
	

<p>西町の天然寺に飾られている額の事です。江戸時代、日本では独自の数学「和算」が発展しました。算額は数学の問題の解き方を一般の人に知らせるために神社などに納められたものです。当時の数学は今の中学から高校程度のもので、この地方の学問の高さがうかがえます。</p> <p>木島平村には現在、8面の算額があり、全国的に見てもこの小さな村に8面の算額が存在しているのは非常に珍しいそうです。</p> <p>納めた方たちは次のとおりです。(写真)</p> <p>●天然寺 弘化2年(1845年)7月 本山湖浪宣智 嘉部姑射麓智忠</p>	
--	--

有形民俗文化財 (指定番号第49号) 算額
所在地: 大字上木島 3336(天然寺)
指定年月日: 平成11年4月16日

無形民俗文化財 (指定番号第44号) 内山の柱松子	<p>柱松子は、一種の火まつりの祭事であり、修験者(仏教で修行する人)の験競べの系統に属するものです。</p> <p>修験者の民衆に及ぼした芸能は、その範囲は種々ですが、これを大別すると(1)験競べの一群と(2)神楽を中心とするものになります。神楽もそうであるが、験競べも平安時代頃より修験者によって全国各地にさまざまな形で残されています。中には長い歴史の流れの中で、それぞれの地域の特性をもって伝えられているものがあります。この内山の柱松子もその一つです。</p> <p>毎年7月14日夜9時頃、内山のお宮から神輿、灯笼、まつりの道具を持った若い衆と小学生男子の行列が村の中を通過して、大日如来の堂へ1時間半くらいかけて練って行きます。ただし、神輿は若い衆が10人ばかりで村内をはじめ平沢や北鳴まで暴れまわっていきます。お練が大日堂の前に着くと、6年生の天狗(てんぐ)がたいまつでシメを切り行列が中に入ります。おまつりの場所には高さ約3m、直径1.5mの柱松が2本立っています。</p> <p>神輿が入って来てしばらくして火祭りの験競べの競技が始まります。まず中央の台石に面をおおった松太鼓が上がり、太鼓が打たれると競技が始まるのですが、何回も打損じるマネをして場を盛り上げます。太鼓が鳴ると同時に、柱松に登っている者に火打ち石、火打ち金を渡し点火を争います。上の柱が早く燃えると天下泰平、下が勝つと五穀豊穡と言われていました。</p> <p>この柱松子の行事は、飯山市の小菅の柱松子のものよりは、規模が小さく方法は単純ですが、同じ系統のもので現在は県下にも例が見当たらず、貴重な民俗資料文化財です。また数の少なくなった修験道研究の重要な資料となるもので、最近形式がだんだん簡素化されて来ているこの行事を、今のうちにもとの形に戻し、関心を高める必要があると思われます。</p>
所在地: 大字穂高(内山)	
指定年月日: 平成6年4月25日	
	

<p>無形民俗文化財 (指定番号第45号) からす踊り</p>	<p>鳥踊りは、北信地方の民踊として代表的なものの一つであり、比較的古いものです。鳥踊りはいつ、どのように、どこで始まったのでしょうか。これを考えるとき、鳥についての信仰と、鳥踊りというものの民衆の芸能ということから考えていかななくてはなりません。鳥についての信仰は、柱松子と同様に修験道と共に庶民の信仰生活の中に広がっていました。鳥踊りの修験道の験比べ（鳥飛び）などがその例ですが、鳥の飛び様子を踊りの中に取り入れているものは、この地方でも案外あります。しかし、歌詞も踊り方もよく似ているものは「盆じゃもの」、「宣澄踊り」「ノヨサ節」があります。鳥踊りもこれらとの比較によってそのつながりを考えていかななくてはなりません。</p> <p>鳥踊りの歌詞は、五七五かまたは七七五の3つの節からなるもの、あるいは七七七五の近世の歌謡調も多くあります。歌い方は音頭取りと踊り手の返しが、最後の節を返して次につなげて行く連続形式のもので、歌詞の内容も大体連続して展開していくところもあり、物語風にもなり、またそこに入る即興的な機知に富んだ川柳的なものなどと共に日本の民踊の発生と発展の特質を備えたものです。</p> <p>だいたいそうですが、歌詞の大切な所は信仰的なもので、地域の特性ある日常生活を歌ったもの、人と人とのつきあいの上でのうれしいこと、怒ること、悲しいことなどの気持ちを現したものが主であり、参加者に強い関心を持たせるようにしています。踊り方も節（メロディー）も素朴で気楽に踊れるようになっており、ゆったりした中に活発性もあり、あきのこない踊りです。このように民踊として理想的な要素を持ち、この地域で永く伝えられて来っており、最近までは盆踊りなどには、北は新潟県の十日町まで、西は野尻湖付近まで広がっていました。本村でも何かにつけて全村で鳥踊りが踊られ、「からす踊保存会」を中心にその保存にも力を入れられています。</p>
<p>所在地： 木島平村全村 指定年月日： 平成7年5月24日</p>	
	

この行事は、火祭の祭事的一种であり、その要素の内容は、修験者の験競べの系統に属するものといつてもよいものです。この修験者が民衆に及ぼした芸能は大別すると、1.験競べの競技要素に重きを持ったものと、2.山伏神楽を中心とした芸能的、宗教的なものがあります。

この両者は歴史的には、平安時代頃から修験道によって発生したもので、全国的にはその地域々々の特性に彩られて伝承されて来たといつてもよいでしょう。

南鴨の柱松子も、他の地方の柱松子と大同小異のところもありますが、詳細に比べると、独自のものが見出せるものがあります。

祭日は以前は7月28日でしたが、最近はこの期日に近い日曜日になっています。そして、長い歴史の間には、祭礼を火事によって中止したこともあり、また昭和35年には風紀上ということで中止勧告が学校からあって、しばらくの間中断したこともありましたが、平成5年区民の熱意により復活して現在に至っています。

行事内容は、7月28日の昼食後公民館に区の役員と小学生男女全員が集合し、役割にとってそれぞれの衣装を身に着けて、午後2時頃神主を先頭に小学生児童を中心に区の役員と共に練りで大塚山の祭場に向かいます。祭場では二本の柱松子を中心に着火の験競べをします。大塚山の祭場の祭事は大日如来で、以前はこの周辺の修験者の道場でした。その後この祭場が区に委譲されて現在のようになっています。

この行事は、飯山市の小菅の柱松子の行事に比べると小規模で内容も単純化していますが同系統のもので、現在柱松子の行事は県下でも希にみる貴重な民俗文化財であります。区民はこの祭事に旺盛な熱意があり、また、以前は男子のみの行事でしたが、現在は小学生男女全員の参加で行っています。このような地方文化の活性化を大切にしているものは、大いに奨励したいものです。

<p>無形民俗文化財 (指定番号第48号) 南鴨の柱松子</p>
<p>所在地： 大字住郷（南鴨） 指定年月日： 平成11年4月16日</p>


<p>無形民俗文化財 (指定番号第55号) 中町の盆じゃもの</p>
<p>所在地： 大字上木島（中町） 指定年月日： 平成17年4月19日</p>


13世紀の中頃、一遍上人が仏教の布教のため「念仏踊り」を民衆に勧め、精力的に行脚されたそうですが、この念仏踊りが長い年月をかけて、宗教や社会環境に影響されながら、地域性を取りこんで、複数の踊りに変形したと伝えられています。

「盆じゃもの」の発生や伝承は詳らかではありませんが、こうした歴史的経緯の中で、盆じゃものも、念仏踊りの源流から派生した一つとして、北信地方一帯で唄いつづけ、踊りつづけられてきた、かけがえのない芸能であると考えられます。

「盆じゃもの」は当初特定の名もないまま伝承されてきましたが、「盆だからなあ」「盆がくればなあ」という期待と、先祖の諸精霊を迎える敬虔な心をこめて、誰言うもなく自然に付いたものでしょう。

古来、盆・暮は二大年中行事であり、特に盆踊りは青年男女の娯楽の場でもありましたが、明治40年頃、警察の風紀取り締まりに逢い、一時衰微したこともありました。

大正時代に入り、大龍寺の庭において、8月14日から17日までの4晩、開催されるほど盛りました。

太平洋戦争があつて、一時中断しましたが、戦後再び開催され、踊り子の輪が大龍寺の庭に幾重にもできるほどの賑わいをみせました。

近年は、余暇利用や娯楽の多様化に伴い、近隣各地の各種盆おどりが衰退あるいは廃止される現状のなかで、「盆じゃもの」の伝承と保存を危惧する人々の声が高まり、平成12年「中町盆じゃもの保存会」を設立して由緒ある「盆じゃもの」の伝承と保護に努めています。

<p>民俗資料 (指定番号第31号) 百庚申</p>	<p>昔、暦（こよみ）や年は干支（えと）と呼ばれる数え方で数えられていました。 十干（じっかん） 十二支（じゅうにし）</p>
<p>所在地： 大字往郷 1497 の 2（庚） 指定年月日： 昭和 60 年 1 月 5 日</p>	<p>①甲（きのえ） ⑥己（つちのと） ①子（ね - ねずみ） ⑦午（うま） ②乙（きのと） ⑦庚（かのえ） ②丑（うし） ⑧未（ひつじ） ③丙（ひのえ） ⑧辛（かのと） ③寅（とら） ⑨申（さる） ④丁（ひのと） ⑨壬（みずのえ） ④卯（う - うさぎ） ⑩酉（とり） ⑤戊（つちのえ） ⑩癸（みずのと） ⑤辰（たつ） ⑪戌（いぬ） ⑥巳（みーへび） ⑫亥（いのしし）</p>
	<p>上の十干と十二支を組み合わせて日にちや年を数えていました。組み合わせると甲子（きのえね）から癸亥（みずのとい）まで 60 通りの組み合わせができました。庚申（こうしん）もこの組み合わせの 1 つで、「かのえさる」の別の呼び名で、60 日、60 年に 1 度めぐってきます。</p> <p>この日は人間の中にある 3 尸(し)の虫が夜、人間の眠っている間に爪の間からはい出て、天の神さまにその人間の悪い行いを言いつけ寿命を縮めると信じられていました。そこでこの虫が眠っている間に抜け出さないように一晩中寝ないで朝まで起きていたのです。こうしたことを、日の出を待つので「お日待ち」と言いました。</p> <p>庚の百庚申は文久年間（1860 年代）の頃、庚の高山弥平太が事業がうまくいったお礼に建てたものです。庚申塔が百体もあるという百庚申は県下でも珍しいことです。いまでも庚申は講（こう）という集いをもって 60 日、60 年に一度行われ、庚申の年には庚申塔を建てて、長寿を願ったり、事業がうまくいくように願いがかけられます。最近では昭和 55 年（1980 年）に建てられています。</p>
<p>鉄剣は、平成 12 年度の根塚遺跡第 5 次発掘調査により発見されました。この時代のものとしては長剣に分類される鉄剣です。保存状態もきわめて良好です。形状は一般的ですが、平成 14 年度に刊行された遺跡の調査報告書で、平成 8 年度に同遺跡で発見された 1 号剣、2 号剣（渦巻文装飾付鉄剣）と同じく、朝鮮半島産の製品として分析結果が報告されています。1 号剣、2 号剣とともに、古代の日本と韓国との関係を考える上できわめて貴重な遺物といえます。このため、未永く保存して後世に残さなければならないものです。なお、鉄剣は 1 号剣、2 号剣とともに、共伴する土器から 2 世紀後半から 3 世紀前半のものと考えられます。</p>	<p>考古資料 (指定番号第 50 号) 鉄剣（3号剣）</p> <p>所在地： 大字往郷 914-6 指定年月日： 平成 15 年 4 月 17 日</p>
<p>古文書 (指定番号第 15 号) 泉龍寺文書</p> <p>所在地： 大字往郷 3705 指定年月日： 昭和 56 年 8 月 18 日</p> 	<p>高石の泉龍寺は、戦国時代末期から江戸時代初めの貴重な古文書を保存しています。泉龍寺の歴代住職関係書状、木島平地方を治めた豪族市川筑前守からの書状、幕府代官からの書状などがあります。このような古いものが完全によく保存されているのはめずらしいことです。残されている古い文書は次の通りです</p> <ol style="list-style-type: none"> （1）節香徳忠授楽翁正佶相承嚙嗣書 (せっこうとくちゅう らくおうしょうきつにさずくる しょうじょうのきんししょう) （2）節香徳忠授楽翁正佶血脈 (せっこうとくちゅう らくおうしょうきつにさずくる けつみやく) （3）節香徳忠授楽翁正佶血脈別本 (せっこうとくちゅう らくおうしょうきつにさずくる けつみやくべっぽん) （4）節香徳忠授楽翁正佶大事 (せっこうとくちゅう らくおうしょうきつにさずくる だいじ) （5）市川信房泉龍寺宛寄進状 (いちかわのぶふさせんりゅうじあてきしんじょう) （6）市川信房泉龍寺宛寄進状 (いちかわのぶふさせんりゅうじあてきしんじょう) （7）楽翁正佶法衣讓状 (らくおうしょうきつほうえゆずりじょう) （8）幕府代官青木俊定等連署禁制 (ばくふだいかんあおきとしさだとうれんしょきんぜい)